

ソードアート・オンライン——鉄の執行者——

亀宅

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

——始めようか。《鉄》と《金木屋》の物語を。

- 第一章：小さな約束
- 第二章：天の剣
- 第三章：の掟
- 第四章：層る??
- 第五章：堕ちた天??
- 第六章：神オーヴェリア
- 第七章：の騎士

目次

プロローグ	1
プロローグ	1
第二話 ルーリツド村	7
第三話 昼の談話、そして果ての山脈へ	16
第四話 白竜の骸	26

プロローグ プロローグ

二〇二二年十一月。

フルダイブ型VRMMORPG《SAO》——《ソードアートオンライン》にログインした一人ものプレイヤーは、製作者《茅場晶彦》の手によってログアウト不可、つまりステータスのHPバーがゼロになった瞬間、現実世界でも死亡するというデスゲームに巻き込まれた。

だが、そんな状況の中、それに抗うプレイヤー《攻略組》の手によって《SAO》の牢獄《浮遊城アインクラッド》の攻略は二年という年月を経て七十五層にまで及んでいた。

そして、ゲーム内にプレイヤーに紛れ込んでいた茅場晶彦——プレイヤー名《ヒースクリフ》が一人の少年に倒される事で《SAO》の攻略は七十五層にて終幕した。

そして、その《SAO事件》において茅場晶彦が死亡し——一人のプレイヤーの致命的な裏切りが判明したことによって幕を閉じる。

そして、その出来事から二年。

北欧神話と妖精たちの仮想世界《ALO》——《アルヴヘイム・オンライン》。

機械油と銃弾の仮想世界《GGO》——《ガンゲイル・オンライン》。茅場晶彦の遺産《世界の種子》が広まり、数多の仮想世界が生まれる中、二つの世界で起きた二つの事件を一人の少年と一人の裏切り者の手によって瞬く間に解決し、《SAO生還者》^{サバイバー}はようやく本物の平穏を手に入れた。

そしてこれから始まるのは英雄の少年と裏切り者を巻き込んだ、もう一つの大きな事件の話。

悪名高き《アインクラッドの離反者》。《世界の種子》に次ぐ茅場晶

彦の遺産の一つ。

嘗て《鉄》と呼ばれた一人の剣士が拓く物語だ。



《アインクラッドの離反者》。

SAOの《ハカリ》というプレイヤーを示す、今の名前だ。まあ、何とも堅実な名付けだと思う。

俺もあの世界では《攻略組》の一人だったのだ。ゲーム解放の為に攻略に勤しんでいたと思えば、黒幕と身内とも言える関係で、しかもその計画の全容を知っていたのだから、俺にこんな名前が付くのは必然だと思う。

仮想世界ではとりわけユーザーの感情に対して素直な反応を示す事がある。それは頭に装着したVR機器が取り付けたログインユーザーの脳から出る電波を直接仮想世界の動きに還元している為だ。

そこで二年という年月を過ごしてきた彼らが言うのだから、まあ、その表現は妥当なのだろうと思えるし、納得がいく。というかあまり疑いたくない。それはまるで自分のこれまでの生を否定しているようにも聞こえるから。

——というのが、俺がこの《SAO事件》を読んだ感想だ。

あの鋼鉄の城の中で起きた出来事を攻略組の誰かが著したものである。多少誤植と誇張されている部分はあるが、大部分が忠実通りという内容だ。だが、作中での俺の叩かれ具合が酷いかなり酷い。人格乖離していると思えるような言葉と行動内容から、名前と人格を借りた別人と成り果てている。

特にネットの反応が酷かった。読書後、スレを閲覧してみたところ一言で『クズ』『外道』『クソ野郎』『大戦犯』などと酷かった。俺は別に作品内のように麻痺バフかかったプレイヤーを弄った事など無いし、《閃光》にセクハラした覚えも無い。

(取り敢えず著作者、ゴートウーヘル)

内心著作者に中指を突き立てながら、手元にある嘗ての攻略組が著作した《SAO事件》にしおりを挟んで閉じる。

今いるこの場所は伊豆諸島付近の海上に存在する巨大研究施設《ラース》。

決して広くない部屋。視界に映る簡素な机、椅子、そして自分が腰にかけているベッドは自分で見ても人間味が薄い気がするが、俺はこれでも匿われている身。部屋を飾るなど、欲張りな事は出来ない。

充電は大丈夫そうだなと、感じたのと同時腰のプラグとコンセントを切り離す。

立ち上がると、長らく同じ姿勢であったためか体の関節部分がやや動かすにくい。

肉体ある人間がやっっているように、背筋を伸ばす体操をしたり、腰を左右に曲げたりする。本当に精巧だなあ、と思いつつ体に異常がない事を確認し、

「そおい!!」

腰を目いっぱい入れ、ドアに向かって黒いカバーの本を思いつきり投げた。

「ハカリく休憩上がりつす——ぐはあ!!」

直後開かれたドアの向こうから現れた金髪の男のメガネに直撃し、メガネの破損音と共に床に仰向けに倒れ伏した。

「見事の中。だが仕事はたりーぜ比嘉っち」

「……そんな勢いで投げられるなんて、僕の研究も無駄じゃない、つて事ツスね……ラースばんざい……」

「とんだマッドエンジニアだぜオイ……」

こちらら真正面から大分厚みのある本を思いつきりブン投げたというのに、鼻血を流しつつもデータを取る姿勢はマッディーなエンジニアのソレにしか見えなかった。

目の前で正直ドン引きな光景を見せてくれたこの愉快的な男は俺の所属する研究施設《ラース》の同僚——比嘉健だ。《SAO》の件で必然的に交友関係がシャットアウトしてしまった俺の数少ない友人と

形容できる人物。俺にこの体を提供してくれた人物でもある。こちらら心中複雑だ。

「さ、誘い乱れる、銀飛車角……」

「ふむ、頭の治療が必要か？ 《STL》入る？ そこからお前の頭をサイバーテロる事も出来るんだが——」

「冗談怖ッ！」

俺のちよつとした脅しに比嘉つちは早急に立ち上がり、鼻にティッシュを詰め込んだ。お前メガネの優先順位はどうした。

「えーと、休憩時間は終わり？ つーか仕事が大変なら俺をノンストップで扱えばいいだろ」

勿論、仕事はなるべくしたくは無いが上司と部下という関係上そういう扱いだって可能だ。

比嘉つちが部屋に来る前にあらかじめ用意しておいた全く同じ型の眼鏡を渡し、壊れた眼鏡はゴミ箱に出すとシュートする。勿論度も合わせてある。

「ああ、あざます……つてそういう訳には行かないんすよ。人格がある以上、休憩は必要不可欠。ハカリがぶっ壊れない為のケアをこの僕が怠るとでも？」

「……まあ、俺を人間扱いしてくれるのは嬉しい限りだが」

比嘉つちの何気ない言葉に何処か安堵している自分があるのが分かる。

もう世間体から俺を人間扱いする人物は《SAO事件》終幕から二年経った今ではかなり激減した。勿論、事情故会えなくなった人物もいるし、この体を持つ性質故の避けられない弊害として一応は割り切ってはいたものの、比嘉つちのように人間扱いしてくれる人物がいるのは正直言っただけかなり安心する。顔面に本を投げられるような関係は現実世界では割と重要だろう。

この身体からだ、身体というのも可笑しな話だが、本質は人間ではない。俺がこうして人間のように活動しているのも比嘉つちが現実世界で体を得られるように計らってくれたから。

俺は《SAO事件》に関わった政府関係者からはこう呼ばれている。

——《茅場晶彦の遺産》、と。

まあ、単純な話、俺は高位人工知能——AIなのだ。

ヒースクリフ——茅場晶彦が《世界の種子》に次いで残した数少ない《遺産》の一つ、というのが俺を取り巻く周囲の認識である。

《SAO》はVRの歴史上、最低最悪の事件ではあるが、その反面この情報化社会の日本の発展に大きく貢献したのはまず間違いない。現に今でも《世界の種子》によって生み出されている仮想世界も嘗て《SAO》に搭載していた自律プログラム《カーディナルシステム》の旧型をベースにしている。

そして、俺という存在は世間一般の《AI》という概念そのものを覆す。

人間に最も近付いたAIなら、利用価値はいるだけで莫大なものだ。それこそが俺を《茅場晶彦の遺産》と至らしめる原因だ。

——何ともまあ、傍迷惑な話である。

今の所、周囲には味方になってくれる人物は極僅かしかおらず、今ではこの《ラース》内で引き籠っている現状だ。

《SAO》の仲間には会うわけには行かない。

当然だ。奴らにとつて、俺は裏切り者。誰かが否定しようが、俺のした事は覆らない。正直な所、今では仲間というのも烏滸がましいかもしれない。少なくともあちらがこつちを完全に離反者として見ているのは知っている。仕事の関係上、この身体で外に出向く事がぼちぼちあり、そこで偶然あのデスゲームで共に攻略し、共に生き残った仲間と遭遇した。

結果、一部を除いて俺に蔑むような視線を向けて来た。

まあ、当然だろうな。

あそこまで来てみんなを騙してのうのと生きていたのだ。そりゃあ必然的に俺を蔑むだろう。じゃなきゃ正直俺と同じ人間じゃないか、もしくははその人間性を疑う。

俺が犯した罪は消えない。恐らく、これから一生背負って生きていく。俺の生まれ故郷とも言えるあの鋼鉄の城は消えてしまっても、恐

らくは俺というAIがデリートされるまで永遠に縛り付けられる。

——だが、まあ、寂しくはある。

だから、比嘉つちのように全て知っていて、何も気にせず接してくれるのは気が助かる。

「いいんすよ。元々常に実験に付き合わせてるみたいなものだし。つーか休憩は取るべき。いや、マジで」

「おう、何か説得力ある言い分。あざず」

最後には早口になって目元を暗くさせていった比嘉つちに彼の精神的疲労が伺える。これマジで休ませないとヤバいんじゃないか、と思いつつ、まあ、今後行うプロジェクトの隠蔽の為とはいえ、スタッフが業務内容と比べて異様に少ないのも一つの原因だろう。俺のこの体でさえ、そのプロジェクトに並行して行っている実験そのものなのだ。しかもこの体の開発自体は比嘉つちが一任している以上、その疲労も割り増しと言った所だ。

「さっ！ 激務が戦闘に変わる前に行くツスよ！ 今日待ちかねの《STL》実験機ダイブツス！」

「激務が戦闘に変わる仕事に俺行きたくない。こっそり部屋に戻って留守のフリしていい？」

「逃がさないからな」

「あつ、ハイ」

比嘉つちが比嘉になった瞬間を見て、やっぱりこの職場ヤバいんじゃないかと思ひ直す今日この頃だった。

第二話 ルーリツド村

人界曆三七二年七月《ルーリツド村》

《人界》の最北端、のどかな村の一角にある麦畑を柔らかい風が撫でる。青空から照り付けるソルスの光は麦畑を光らせ、村の一部を金色に染める。

そんな何の変哲もない穏やかな場所に悠然と佇む黒い巨木。地中に根を張り、地中に存在する《テラリアの恵み》を吸い込んでいる影響で大樹の周辺に木が生える事は無い。成長に成長を重ねて異様と形容できる大樹の周りには影ができ、ソルスから照り付ける光でさえ遮る。

村にとって悪影響でしかないその巨木はその在り方から悪魔の樹、または最大硬度の木として《ギガスシダー》と名付けられた。

だが、寂しげに佇む孤高の大樹の真下に、態々集まる人間がいた。

「いいか、キリト、ユージオ……一度だけぞ……一度だけ」

「俺は準備できているぞ……後はお前だけだ、ユージオ」

「ねえねえ……こんな事やめない？ 普通に振ろうよ普通に。聞いている感じ何だか凄いアレだったんだけど。初っ端から逃げ出したいんだけど」

わかってないな、と呟きながらやれやれといった様子で黒髪と長髪の少年はブロンド頭の少年を見やる。対してブロンド頭の少年はそんな二人を酷く呆れた様子で見やる。この場で大人なのは彼だけのようだ。

「いいか、ユージオ。今からやる事は強い意思力が一番重要なんだ。あくまでそのイメージを固めるためのもの。意味はある」

「うん。その心はっ」

「カツコいいから」

「凄いよハカリ……普通そんな堂々と言う事出来ないから……」

ハカリと呼ばれた少年が言った事は割と重要な話なのだが如何せん、バカにされるネタが増えただけに終わった。ハカリも大概アホであった。

「俺はそれで構わない！　というかどうでも良い！　さあ、やっちやっつけてくれ、ハカリ！」

「何ぬかしやがるこいつ」

「ノリノリだねキリトは」

目を輝かせてサムズアップを浮かべるキリトにユージオは感服する他ない。

まあ、いつもならもつと何かを言っている所だが、今回ばかりはユージオも黙っておく事にしている。

何せハカリ達一行が勤しむ《樵》^{きしり}の仕事——《天職》が自分らの代で終わる可能性が出て来たのだから。そりゃあ、それを咎める発言をする人間は相当自身に充てられた《天職》を気に入っているか、もしくは自身の人生中に終わらせる気が無い人間だけだろう。

この《天職》というもの——文字通り天から与えられた仕事で、これを完遂する事が《人界》に住まう人間のルール。だがその作業は何処もかしこも途方に暮れるものばかり。例えば果樹園を弄繰り回すのが《天職》だった者はどうだ。果実の収穫を終える事と想像できるが一年周期で訪れるそれには際限が無い。

その点——ハカリ達は幸運と言える。彼らの目的はこの大樹を切り倒す事。果樹園を管理する事比べて目的がはっきりしており、『明確な』終わりがある。

けれど一概にそんな事も言えない。《ギガスシダー》は何よりも硬い事こそが《天職》の期間を長引かせる要因になっている。《竜骨の斧》と呼ばれる道具で、何千何万と、斧を振り続けて既に三百年以上もの年月が費やされている。現代のハカリ達の代が七代目だ。

それに終わりの手段が見え始めたのだ。まず村中の人間に偉業として称えられ、《天職》を終えたハカリ達は新たな《天職》に就く権利

が与えられる。一生モノの《天職》に勤しむ人間からしてみれば良い事尽くしだろう。

そして、先程までおちやらけた表情をしていたハカリの顔が——一気に真剣なものになる。

「よし、行くぞお前達。俺達の夢の——偉業の第一歩だ」

「ああ」

「——うん」

今から自分らがやろうとしている事、見ようとしている事がどんな事か、それを完全に理解した三人は必要以上に気を引き締めた。

斧の担い手であるハカリはそれをさも『型』の一部のように、静かに息を吐く。

「——村を脅かす巨神の大杉よ」

「ねえどうしようキリト。早速帰りたくなって来た。見てるこっちが恥ずかしくなってきた」

「面白いからこのままで」

これ終わったら覚えてろよ、と口には出さずにハカリは集中する。

ただ一点。午前中の仕事で何度も斧で刻み込み、横に伸びた『切り込み』を見つめる。それが塞がれば、この作戦は失敗に終わる。《ギガスシダー》の木の切り込みは同じ場所に何度も切りつけなければ《天命》は一程度しか削れず、その上表面の樹皮の修復が早い。

まさにチャンスは一度きりなのだ。切り込みを入れるのも一苦労であるこんな樹から生まれる最大にして最高の好機の。

呼吸が止まる。

落ち着きすぎた呼吸は次第に思考は澄み渡らせ、周囲の音声を拾う聴覚でさえ、今はあの切り込み一つに集中している。

——今から『切る』のはあの木じゃない。

手に持った斧に片手用の直剣を幻視する。いつしか見た騎士が持った剣。それをより鮮明に、自分の憧れを形にしていくな。

ここまでくれば後はイメージの補完が完了するまでに邪魔が入るか否か。阻むものが無ければ成功するのは時間の問題である。

想像を現実へ。イメージを徐々に加速させる。

——今から『斬る』のは他ならない人間の深層意識に蔓延る想像。^{イメージ}
目の前には最硬の魔樹。三百年もの年月を経てもなお、その身を傷一つなく佇み続ける巨神。それは並大抵の『モノ』では『切って』も傷をつける事はその気が遠くなるような年月が証明してくれている。

——なら、『斧』ではなく、『剣』で『斬れば』いい。

《斧》——否、剣から青色の光が放出される。右脚を引いた半身の姿勢から放たれるのは彼にとっても未知の動き。それはとても齡十一という幼さで再現できるものでは無く、達者のソレだ。

「——倒れろおっ！ 我が剣術の前にい!!」

肉体を超えた剣閃が強めの語気に応える様に剣が唸る。幹に刻まれた切り込みに青光の一閃が奔り、大気を切り裂きながら切っ先は幹の切り口へと向かう。

瞬間、樹から発せられるとは到底想像がつかない甲高い音を剣から大気に轟き、火花の代わりに青い光が散る。

決まった。

技が工程が完璧に完了した瞬間、それを確信する。あの幹の芯に確実に届いた感覚。感じ慣れたものではあるが、今回は今まで以上に削れた手応えがある。

因みにこの光景の傍らでは既にハカリのその拗らせ具合に後ろのキリトはぶはつと吹き出し、ユージオは複雑そうに歪む表情を隠す様に両手で顔を覆っていた。

「——上……出来」

確かな手応えと共にそう呟いた瞬間、握っていた手から剣——既に斧に戻った《竜骨の斧》がハカリの手から滑り落ちる。思考が元のギアに戻り、余程集中していたのか、それともそれを気にする余裕すら斧を振るう力に注いでいたのか、ぶわつと疲れによる汗がハカリの体

中から溢れてくる。ついにその倦怠感に耐えられなくなり、ハカリは尻もちをついた。

「ハカリ?! 大丈夫?!」

「あゝ、大丈夫だ。コレ多分緊張から来てる奴だし」

先程とは打って変わって心底心配そうなユージオにハカリは軽く笑って返す。

まあ、ハカリの言い分は正しい。ぶっちゃけあの『斧を剣に変えた術』のフィードバックはそれ程重大なものでは無い。言ってしまったらハカリの『気のせい』。要は『錯覚』だ。

本人としては、寧ろそうでなければ困るといった具合だ。これから使用する予定であるあの摩訶不思議な現象を使用する度にこんな状態になってしまえばこの延々と続く作業は全く捗らない。

「ホラ、とつとと確認しようぜハカリ」

「あいよ」

相変わらずバツサリしてるなあ、とキリトの切り替えの早さにハカリは内心眩きつつ、キリトから差し出された手を掴み取りながら立ち上がる。

「《天命》を覗くなんてやめようよ——などという無粋な事は言うなよ? ユージオ」

「流石の僕でも空気は読むよ……ってハカリに言われたくないんだけど」

「はーいそんな事は知らーん!! そーらー! キーメーてーけーよー!!」

「キーメーてーくーぜー!!」
「そういう所だよ……後キリト。悪ノリしない方が良いよ。アホがうつる」

初対面の頃から全く変わらない難聴具合のハカリとそれに悪ノリするキリトにユージオが頭を痛めつつ、二人の《天命》を覗く動作を確認したのでそちらに向かった。

黒の巨木《ギガスシダー》に向けて左手の中指と人差し指を伸ばして空中に二つの曲線を描き、幹の切り口を叩いた。

この世界の動物、植物、物体の全てに存在する《天命》を覗く為に創世神《ステイシア》からの恵みの一つ、《窓》を開く。

瞬間、薄い紫色の四角形の窓が空中に展開される。

この《窓》に表示される《天命》、万物に表示される命の残数を数値化したものが《天命》と呼ばれるものだ。この値が『0』になった時に物は壊れ、植物は枯れ、動物は死に——勿論、人間も死ぬ。

これと同じように《ギガスシダー》の《天命》を削る作業こそがハカリら《樵》達の仕事なのだ。これらのシステムが他の《天職》と違い、《樵》という仕事がありあるものだという事の証明となる。

「いならば——《天命》の存在する《天職》、と言った所だろう。」

「……………」

《樵》の子ども三人は窓に表示される《天命》の数値を固唾を飲みながら凝視する。

ハカリが偉業と称した切り込み、それを傍らで見ていた野郎二人は理解している。これが偉業に値するものだ。

ハカリの口走ったセリフの所為で色々台無しにはなっていたものの、キリト、ユージオ達はあの現象を間近で見ていたのだ。自分らの知らない剣技、あの《神聖術》のような

斧を變形させた術の全てを。

《衛士》の《天職》でも無いのに剣技を発動出来た事や神聖術の才能が特出しているわけでもない彼がそれに似たナニカを発動した事などの未発見の出来事にたいする疑問は未だ潰えない。

だが、それは後回しにしても良いと思った。夢と偉業の第一歩を見れるくらいなら、と。ハカリの性格を良くも悪くも熟知している彼らにとって、ハカリの行動は信頼ツするに値するのだ。

「えーと先月が確か……………23万……………5590だったか？」

「お、先月の事なんてよく覚えていたな。アホが治ったか？」

「ハカリは黙ってて。えーと今の数値は？ ……23万5101……………」

一瞬、静寂が訪れたのはほんの一瞬であった。今何と言った、と。

「ハカリ、計算だ」

「アホのままみたいだなキリト。答えは491——え——
………」

再び、重いような軽いような、微妙な空気を漂わせた静寂。数値にしてみれば、ほんの僅かな変化だ。

だが——

「や、や、」

「お……」

「……………!!!」

坊主三人が各自独特な反応を示す。だがどれの肩も震えており、無言のユージオでさえ目に見えて分かる程震えていた。

そして——

「「や、やったあああああああああつ!!!」」

感極まった少年たちは今の感情の昂ぶりを絶叫と共に放出した。

莫大な数値からしてみれば微量すぎる『491』という数字。僅かで、大きな変化が見れる事は無い。

だが、少年たちの心を揺さぶるには十分すぎる事態だった。

「凄い！ 凄いよ！ 僕ら、今凄い現場目撃したんだよキリト！」

「ああ！ 今のだけで半年分の仕事軽く超えたぞ!!」

「やべえ！ 今なら俺キリトを双子池に全裸で泳がす事が出来そう
！」

キリト、ユージオ、ハカリの三人が阿鼻叫喚してる中、明らかに理不尽な罰ゲームにつき合わされかけている者がいる事を除いて、三人の中では歓喜で満杯だった。

最初は乗り気ではなかった筈のユージオでこの喜び具合であり、基本落ち着きが皆無なハカリは今まで以上に落ち着きを無くしていた。キリトも同様だ。

その後、何度も計算したり、《窓》を開けたりして間違いが無いか確認したりして、

ひとしきり喜んだ後、訪れたのは静寂だった。

「……………」

顔は見合わせず、三人は仰向けに倒れ、一様にその七月の空を見つめていた。

嫌な静寂ではない。現に三人の顔は感情のほとぼりの最高潮を超えてもなお、満ち足りており、あの光景を思い出すだけで口角が上がってしまっていた。

今の光景はまるで村で見た物語の英雄の少年期のようで、その当事者が自分らとなれば、その興奮は簡単に冷ませるようなものではない。

幸い今日の分の仕事は既に先程の出来事で終わってしまっている。否、言い換えれば八か月分の休みを設けられたのだ。だから今だけでもこの悦に浸っていたいと、三人は思ったのだ。

「……………言っておくが、俺らがやるのはこれより先の事だぞ?」

その沈黙を珍しく真面目な口調でハカリが破った。

お前そんな風に喋れるのかよ、と二人が思う中、その答えは――

「当たり前前だろ? 俺らが目指すのはもつと凄い事だ。この樹を完全に倒した暁には――」

「村長に新しい《天職》を与えて貰って……………ザッカリアの学院の修剣士になる、でしょ?」

既に前を向いていた。自分らはこれで終わらないと。だからここで立ち止まってはられないと。

その答えを聞いてハカリはまた満足そうに顔を綻ばせた。そして我ながら良い友達を持った、と誰にも気づかれないように内心誇っていた。

気付けば既にソルスは正午を迎えようと西へと浮上している。三週目の七月を迎えるこの時期のソルスの光は正直言つてハカリ達子どもには耐え難い。

冷静になったハカリの頭が汗で滲む体を布で拭き取ろうと幹へと向かった所で――

「「ん?」」

そこで、何かを忘れている事に気が付いた。

何か、とても重要な事を見落としているような。具体的には今日の昼食の件で――

「こらあー！　またサボってる！」

「逃げるぞ！」

「おう！」

「うん！」

その怒号が聞こえた時、ハカリ達《樵》一行は全速力で逃げだした。

第三話 昼の談話、そして果ての山脈へ



「はあ?! ?でしよそんなの?!」

「嘘も何も、当事者は俺の他に二人もいる。ハカリが樹の《天命》を削った張本人だ。な?」

キリトの話に驚愕する少女。何とか少女の説教回避に成功したハカリ達は昼食を取っていた。

話を振られたキリトにハカリは頭を上下させながら用意されたバスケツトに手を伸ばし、目に留まったパイを掴み取って口に咀嚼させる。

美味かった。生地に練りこまれたバターの香りが咀嚼の度に口の中に広がり、具材の肉は程よい焼き加減で、午前中の仕事で湧いた食欲をこの上なく満たしていた。

そして、傍らに置いてあった僅かに甘みを感じさせるミルクで喉を潤す。

「ハカリ! 本当なの?!」

「っ! 本当だ。というか近いっ、近いっの……」

「あ……ぶ、ごめん……」

急接近して来た少女に驚いたハカリは手に持ったミルクを零しそうになりながらも、腰を地面につけたまま後退する。

金色の髪はソルスの陽光を反射させ、まだ幼い顔から覗く深い青の双眸は羞恥心のためか、今はそっぽを向いてしまっている。

言わずもがな、彼女こそがこの昼食を用意してくれた張本人——アリスだ。

先月から始まった彼女の弁当計画だが、飯を喰らうハカリに対して

期待の眼差しを向ける彼女に、彼は終ぞドキマギしっぱなしである。それに今回は相応のイベントが発生したためか、アリスの接近距離が普段より近いのも原因の一つだろう。

そして、アリスが弁当を作ってきたこととハカリが何故アリスに対してどぎまぎしている原因を知るキリトは順調にやってるな、と言わんばかりの笑顔を浮かべ、同じく理由を知るユージオは微笑まし気に視線を送って黒パンにかぶりついている。

それに気づいた二人が余計に恥ずかしくなったのか、互いに咳払いをしてから話題の方向修正を試みた。

「そ、そうそう、キリトの話、本当なのよね？」

「あ、ああ。まあな。そのお陰でぱつと見八か月分の仕事はしたと思う」

「えええ!!」

「近いっつの! 天命減る! 心臓破裂で減るからっつ!」

興奮冷めやらぬと言った様子で再び接近して来たアリスにハカリは対応しきれず至近距離で彼女の顔を見つめる事になる。その時のハカリの顔と言ったら耳まで真っ赤で、もう年齢独特の初々しさが半端じゃなかった。普段はふてぶてしさが目立つ彼でも不意打ちにはめっぽう弱いのだ。そして同じように普段元気湧刺でハカリ達を振り回すアリスもそんなハカリの反応を見てクールダウンした羞恥心がまたヒートアップしたのか、彼と同じように顔全体を真っ赤にしている。いや、赤さで言えばこっちの方が上か。

そして、アリスはどうトチ狂ったのか、バスケットに入った黒パンのサンドをハカリの口に突っ込んだ。その攻撃により、ハカリの天命が僅かながら減る。

「えと……料理、どうだったかしら……」

ちなみに今の黒パンサンドはバスケットの中身をテキトーに掴み取ったという訳ではない。アリス自身が手伝い無しにハカリの好みをしっかりと把握して、遠回しに聞きこんだりして作った果実とチーズのサンドである。

「……何だか他の飯と違うな」

少しばかり口周りの痛みに苦しんでいたハカリだが、アリスの行動によって少しばかり復活したらしく、比較的落ち着いた評価を下していた。

「え」

「あ、いや。なんか……これ俺の好みドンピシャ。マジで美味しい」

世界の終わりを垣間見たような表情に変貌したアリスにハカリが何かを誤解したと感じ取ったのか、すぐさま評価を上方修正する。現に今のハカリの表情は大分綻んでおり、アリスに半ば強引に口へ突っ込まれたサンドの評価がわかるという物だろう。

基本、ハカリは飯を出してもらえばどんな味だろうと食らう。この姿勢は少しばかり失礼であるかもしれないが、不味くて手を付けないか不味くても完食するかでどちらが礼儀を欠くかを本人なりに考えた結果である。だが、そういった姿勢と裏腹に態度に出やすいため、本人は失礼の無いようにしてはいるが、提供してくれる側からしてみれば本人がどう思っているかバレバレという微妙な状況になっている。

名残惜しそうに黒パンサンドを味わっているながら本当にお代わりがないかバスケットの中身をこそごとと漁るハカリの様子にアリスの表情はみるみる綻んでいく。こんなことは、普段の様子から考えたら絶対にありえない光景だ。

「えへへ……ドンピシャ……美味しいって……お代わり欲しいって……ふふっ」

(うわあ……)

自分の作った料理を美味しいと言われて喜ばない女子などいない、という事だろう。現に彼女の顔はハカリなど相手にもならない程笑顔に包まれており、外野のキリトとユージオはそんなアリスの様子に周囲から花が咲くのを幻視していた。

まあ、キリトとユージオが今感じているのは自身の目の前で男女がいちやついている時の妙な気まずさと考えてくれればいい。同時に幸せそうだなあ、という何処か感慨深いものを感じているが。

「ユージオ、ギガスシダー齧ったらこの口の中の砂糖無くなると思う

か？」

「歯が無くなるよ。せめて《竜骨の斧》にしておいたほうが——」

だが、流石に我慢の限界と言うものがあるのだろう。

アリスとハカリが和気藹々としている外野では二次災害が酷かった。パイを食していたユージオが提案した頃には既に手遅れだったのか、キリトの歯が一時的に機能不全となり、砂糖を吐いて白目を剥きながら地面に倒れ伏している。えらいことなってるなこれ、とユージオは再び顔を手で覆った。まあ、それで《竜骨の斧》を勧めるユージオも大概であるが。

「よし、ユージオ、話を戻すぞ」

「戻るのこれ？」

「戻すのよ」

すっかり普段通りの姿に復活したハカリが倒れ伏しているキリトの食べかけの黒パンを彼の口にぶち込み、同じように復活したアリスはキリトの飲みかけのミルクをキリトの口に流し込む。明らかに人を殺している絵面なんだけど、と思ったユージオの眼は正しい。

「ふう……危なかった。一瞬ステイシア様が見えたぜ」

「もう何が何だか……」

むくつと何事も無かったかのように起き上がったキリトにユージオは再び顔を手で覆った。ユージオの気苦労の絶えなさには恐らく《天命》も僅かながら影響させているのではないだろうか。

「んで、アリスにはどこまで話したんだ？ キリト」

「ねえ、良いの？ これで？」

「ギガスシダーの《天命》を削った正確な数字までだな」

「そうよ、一体全体どうやってあの斧でそこまで削ったっていうの？」

「ここまできるとユージオが不憫でならないが、ここでは敢えて伏せておく。」

そこからハカリはアリスに事の顛末を説明した。自分らが見た事、やった事を事細かく。キリトやユージオもあの時間けなかった『斧』と『剣』についてもだ。そして《衛士》という剣士の役職にしか習得していない《剣技》についても。

だが、それらについてはハカリ自身もちやんと把握している訳じゃないのだ。

というか、アリスが分からないことが自分に分かるわけが無いだろうというのがハカリ本人の言い分である。簡単に言つてハカリはアリスよりアホという事だ。

十歳で《天職》に就いたハカリ達とは違い、アリスは高い才能を秘めた才女と認められた故、現在でも教会の学校で神聖術や帝国の歴史、帝国基本法などを学習している。故にこの状況でアリスが答えられないような内容をハカリが答えられるわけが無く、キリト達の質問については結局曖昧な事しか伝えられないというのが現状である。

「剣技に関しては一月前の休日で《衛士》のおっさんに齧り程度教えてもらつた。褒めちぎつてゴマすつて」

「ほんとそういうところで妥協しないわねあんた……それでその例の不可思議現象は？」

「あの斧が剣に変わった原理は俺にも分からん。というか俺が知るわけないだろう。俺がそんな高い知能を持っていると思う人、拳手」

「無いな」

「あり得ないね」

「アホだしね。あんた」

拳手してワンコメント添えるという手厚い歓迎の上、あまりの容赦の無さにハカリは涙腺が崩れかけるのを覚える。特にアリスにアホ認定されたことが妙に悲しかった。

ハカリは決して頭が悪いわけじゃない。寧ろ発想の転換で言えばハカリを含めた四人の中では群を抜いている。だが、発想の転換の度合いが過ぎているのが問題なのだ。そういったぶっ飛んだ思考回路が色々と台無しにしているため、結果的にアホ扱いをされる事になっている。

決して、頭が悪い訳じゃないのに。

「あれ、まだ目元が熱い……よし、俺は大丈夫。俺は大丈夫。こいつらが頭おかしいだけだから……言つておくがなユージオ、キリト。お前達にもアレ覚えて貰うんだからな。それに、理論とか原理が全くわか

らんからかなり感覚的な指導になりそうだし」

容赦なしの言葉の槍から復帰してそうハカリが言い放つと、ユージオとキリトの表情が一気に曇っていく。アレを自分らも使う事になるとは薄々理解してはいたがいざ面となって言われると色々と思う事があるのだろう。例えばこれから行われるであろうハカリホの感覚的指導とか。あの脳筋の指導は大抵碌なことにならないと心得ているのだ。

まあその辺りは時間をかけていけば大丈夫だろうとハカリは思う。あの力に関してハカリは完全に習得したわけじゃないし、まだ発展途上中であることは確かなのだ。それに思考傾向のバランスはキリトとハカリとユージオの男三人組で案外とれているため、後は根気があれば問題は無い。

「で、でもやっと目途が立ってきたね。正直、僕もこんな事になるなんて思ってもいなかったよ」

遠い目をしつつもしみじみと語るユージオにハカリがああ、と同意してから付け足す。

「後は、《禁忌目録》での規則による縛りの確認が出来ればよしだな。アレばかりは無視するわけにはいかないからなあ」

「え？ あんなん教会にバレなきや大丈夫だろ？」
「やめろ」

キリトの言い分にハカリとユージオがシヤレにならんと言った様子で言い放つ。キリトの腕白っぷりに振り回されるのはユージオだけでなく、意外にも第二候補はハカリだったりする。

だが、ここにはもう一人勇者がいる事を忘れてはならない。なまじ、頭が良いためキリトやハカリよりも質が悪い彼女の存在を。

「あら、私も同意見だけど？ 規則なんて隙間を突いてなんぼでしょ」
「優等生の裏の顔を見たね。その所はどうなの？ ハカリ」

勿論、OKである。ある意味アリスに強く出れないハカリでは当然の結果だった。

それを伝えるためにハカリがサムズアップを送るとまた重苦しく溜息を吐き、中年よろしくミルクの入った壺を一気に傾けていた。そ

の後、むせてキリトの顔面に全て降りかかったが。

しつちやかめつちやかしつ、ハカリ達が軽く話題の軸になっている《禁忌目録》。その内実はあまり軽視出来るものではない。

《禁忌目録》。ここからずっと南にある《央都セントリア》の《公理教会》が発注する人界における絶対的な法。それは村の掟や帝国基本法と言った規則を遥かに凌ぐ力を持った法律である。ハカリ達が《天職》に就く以前、教会で最初に教えられたのはこれだったのだ。それこそ、まるで羊の刷り込みのように教えられたのだ。

その内容はただひたすら『やつてはいけない事』の羅列だ。人を殺してはいけない、盗みを働いてはいけない、《天職》を放棄してはいけない、と言った具合だ。この人界に住む人間の最低限の倫理観を形成しているといっても過言ではない。それを破れば《公理教会》の執行官である《整合騎士》にお縄にかけられる。

だが、それらを全て把握してはいけないという項目が存在するのだから、妙な話である。ハカリの懸念はまさにそれで、自分らが知らぬ間に禁忌を侵す事を危惧しているのだ。

彼らが踏み込もうとしているのはまさに誰もやったことのないような未知の領域。それが禁忌に触れている可能性がある、という簡単な話だ。だが、ハカリ達は全てを覚える気は既に失せている。

各地の村に最低一つは置いてあるとされている《禁忌目録》を記した写本だが、とても全て覚えられる量や写本自体の厚みではない。そもそも覚えること自体禁じられている故に写本本体を貸してくれる筈も無く、目録の把握は半ば投げ捨てていた。

「まあ、目録に反してるなら俺はどうにお縄にかかっているがな……」
「何気に凄い事言ったなお前。アホなのに。あ、そういえばお前一月前から準備してたって……」

「妙な所で頭とその奇抜な行動力が活かされていくからなあハカリは。アホだけど」

「ちよつと、アホアホ言い過ぎじゃない？ 寧ろそこがハカリの良い所でしょ」

「お前らは俺の頭に何か恨みでもあるの？」

俺はもうダメかもしれない、と思いながらハカリが最後のパイに手を伸ばそうとする。

が。それはアリスの手によって阻まれた。

「？ 何だよアリス」

「残念。時間よ」

アリスが残り一切れのパイに向かって先程ギガスシダーの《天命》を覗いた時の様に人差し指と中指を動作させる。

すると、その《天命》の値が0と表示されている事に気づき、同時にやってしまったと言わんばかりにハカリが顔を顰める。

「あんたたちがずっと喋ってるからよ。はい、終わり終わり」

「え〜……」

「……まったく、仕方ないわね。また作ってあげるからそんな顔しないでよ」

食べ物《天命》が尽きる。それはいわゆる『傷んだ食べ物』として扱われ、食った人間はしばらくの間腹痛や熱と言った病気を発するようになる。原因は問わずもかな、この暑さの原因であるソルスの陽光だ。この時期のソルスは保存性の無いものから容赦なく《天命》を削り、このように食べ物を傷ませる。

もう食べられない食べ物になってしまったパイを未だ《天命》が尽きていない干した果実を齧りながら残念そうに見つめるハカリを宥めるアリスの様子は子どもを世話する母親のよう。まあ、早く食べる様に言ったアリスの言葉を忘れて話に没頭してしまっていたハカリ達の自業自得とも言えるが。

「うわあ、まじでかあ」

「まあ、こんな時期だし、今日は特に暑いから仕方が無いよ。確かに食べられなかった事は残念だったけどさ」

その言葉をこっそりと聞いていたアリスは満足そうに片付けに移る。

食事こそ傷んではしまったが、残念がるという事はそれ程の期待感と出来の良さが伺えるという物。それにアリスとしては本命のハカリのあの黒パンサンドを食べさせられたのでさしたる不満はないし、

本日の戦果としては上々である。

だが、そこでキリトが何かを思いついたのか、意味深げに笑みを浮かべた。

「なあ、さつきみたいに食べ物腐らない方法、知りたいか？」

「先に断っておくがなキリト。天候操作は流石に誤魔化しきれないぞ」

「その時《整合騎士》が来たら僕はキリトを置いて逃げる」

「私も断らせてもらおうわ」

「違うよ。この暑さが原因で食べ物腐ってしまうんだろ？ 今ハカリが言ってみたみたいにな候操作がタブーなら一部だけ寒くすれば大丈夫じゃないか？」

「バスケツトの中だけを寒くしようって？ やめておけ。夏に氷でも探す気か？」

キリトの言っている事に一同は確かに同意するが、ハカリのキリトの意見に冷や水を掛けるような言葉にも同意見である為、みんながみんな、微妙な表情をしていた。

「あ、シルベの葉っぱならどうかしら。籠の中に入れておけば少しはマシになるんじゃない？」

「やめておきなよアリス。僕もそれが気になってこの間ハカリと一緒に試したらハカリがお腹壊しちゃったし」

「ほんとなんで俺はあの時面白がって《天命》を確認しなかったんだろうなあ……」

「アホだ。アホがいる」

「アホね」

ユージオの言葉で当時の事を思い出したのか、ハカリが顔色を青くしながらお腹を押さえる。そして、そんなハカリを見て酷評と言う名の武器でハカリに止めを刺す。

沈没するハカリを放っておいて、三人はもう一度深く考える。言い出さずのキリトの言っている事は無茶ではあるがゆっくり食べたというのはたまたまね同意見である。

「夏……氷ね……あ、私心辺りあるかも」

思考の沈黙を破ったのはアリスだった。その言葉を聞いたハカリも直ぐに会話の輪に戻った。

「アリス。もしかして行く気か？ あそこに」

「ええ。そうよ。この前行ったあの場所なら可能性はあるわ」

「勿体ぶるなよアリス、聞かせてくれ」

妙に勿体ぶるハカリとアリスの様子にユージオは恒例と言うべきなのか、背中を嫌な汗が伝っていくのが分かった。

現にユージオの長年の勘と言われる危険探知センサーは的中している。今からアリスが離そうとしているな事は少なくとも行動からして落ち着いた傾向にあるユージオにとってそれはあまり良いとは言えない内容だからだ。

「ずばり——《果ての山脈》よ」

この村のずっと北にある山を指さしたアリスを見て、ユージオは傷んだミルクを飲み干した。

第四話 白竜の骸



ルーリッド村創設の英雄《ベルクーリ》の話をしよう。

ざっと三百年程前に数多くの冒険譚をルーリッド村に残した彼だが、これはその中でも一番奇想天外な展開を描いた物語だ。

『ベルクーリと北の白い竜』。

ある夏、ベルクーリはこの村の東に流れるルール川で大きな氷を発見した。それを不思議に思ったベルクーリはひたすら川の上流を目指し、やがてたどり着いた場所はこの《人界》の最果てに位置する《果ての山脈》、その洞窟だった。

その洞窟から吹き付ける凍えるような風に逆らいながら洞窟を進み、待っていたのは人界の東西南北を守護すると伝えられる巨大な白竜だった。財宝に囲まれながら丸まっている白竜にベルクーリは眠っていると判断し、白竜に気取られないように忍び足で近付いた。

そして、白竜の下にあつた業物の剣に目を惹かれ、豪胆にもそれを盗もうとしたところで――。

「――というのが、話の大筋だ。ここまでいいか？ ユージオ」

「うん。わかった。分かったから。落ち着いて食べよう？」

片手に林檎とクルミのパイを、もう一方にシラル水が入った木製のカップを持ちながらハカリはまるで劇場の語り手のように手を広げ、すつかり語りに熱が入っているようであった。それをやつれた顔で聞きながら終幕させようとしているのはブロンド頭の少年、ユージオだ。

傍らには《果ての山脈》のごつごつとした岩肌に、穏やかな流音を周囲に響かせるルール川。そして、風なりで唸り、ルール川をばつさり切り落としたかのように錯覚させる暗闇が奥へと続く大きな洞

窟が一つ。

穏やかな印象を与える周囲の景色と比べてその洞窟だけは一重に言って不気味なものだ。だが、ルーリッド村随一の腕白組はそんなものの事など気にも留めず、アリスが持ってきた昼食に舌鼓を打っていた。

「またやってるぞ。アリス」

「いつもの事よ。冷めるまで待ってればいいわ」

「む？ 何を言ってるんだ。クライマックスはここからだろ？ 冷めるどころかヒートアップだ。この後がベルクーリが白竜に——」

『竜の懐にあった《青薔薇の剣》を盗もうとして白竜に追いかけられる』、だろ？ 僕の頭が可笑しくなっていなければ、ご飯中にそのクライマックスを迎えたのこれで四回目だけど？」

アレ、そうだったっけ？ などとアホな事を抜かすハカリにユージオはわざとやっているのかと一瞬疑心暗鬼になったが、首を傾げて頭の上にはてなを浮かべ続ける彼を見てやっぱり素なんだと悟り、諦めを込めた溜息を吐く。その様はソルスが最高点に達した日中には相応しくない重いもので何処か疲れが滲んでいた。

頭は悪くない彼だが、素面がアホという特異性を持つ彼がその賢さを出来るだけ早く開花させ、出来るだけ早く聡明になってくれることをユージオは祈るばかりだ。

取り敢えず、今の徒労を誤魔化す為にユージオは手に持った魚と豆のパイにかぶりついた。

ユージオが何を血迷ったのか、死んだミルクを仰いで腹を壊した事件から丁度一日前に当たる先日、ハカリ達村随一の腕白組はルーリッド村のずっと北にある世界の果て、《果ての山脈》の洞窟に探検がてら、足を運んでいた。

週一の《天職》の休息日を利用した探検の目的とは『ベルクーリと北の白い竜』にも出てくる洞窟の氷だ。全ては良き昼食の為。あのユージオが犠牲になったあの忌々しい事件（全面的に自業自得な気がするが）のような事態を今後も起こさないという大義名分の為だ。

そして、丁度探検の折り返し地点に差し掛かったので昼食を洞窟に入る前に取る事にしたのだ。

まあ、結果はハカリのベルクーリ超リスペクトのエンドレスライブなのだが。

「む？ 待てよ、ユージオ。案外お前の頭が可笑しくなっているって強ち間違いじゃないかもしれないぞ」

「ッえ」

「あー、あるかもね。考えてみればハカリのアホに一番振り回されるのってぶつちぎりユージオじゃないかしら」

その直後、無言で俯いて泣きそうな顔になるユージオの姿にラストアタックの立役者であるアリスとキリトでさえ同情せざるを得なかった。まあ、遠回しに友人から真面目に頭おかしくなってるんじゃないのかと言われれば、泣きたくもなるだろう。ちなみに全ての黒幕であるハカリは呑気にパイを喉に詰まらせている。

ユージオもハカリの行動に全て反応しなければいいのに、と思わなくもないが最早体質レベルで勤勉と言える彼がハカリの奇行を無視するなど、多少なりとも出来る筈がない。

だがユージオというツツコミに関しては逸脱した説得力を持つ彼がハカリの奇行を無視するようになったらそれこそお終いな気がするが。

やがて、昼食を終えると広げた白布をハカリがコンパクトに畳み、アリスが持ってきたバスケットの中になってしまう。悲しい事にユージオは絶賛、キリトに慰められ中である。

「ハカリく、ユージオが立ち直らんぞ」

「よし、この干したすももをやろう」

歩きながらかじろうと思っていた干したすももをユージオに上げると、すももって……、とユージオが今度こそ泣き崩れかけたがハカリは構わず洞窟に入る準備に入る。

「はいそー！ 漫才やってないでさっさと準備済ます！ 日が暮れる前に氷を持って帰らなきゃならないんだから」

アリスに促され、ユージオが涙を拭いながら渋々立ち上がり、洞窟

の入口へと足を運ぶ。

ハカリも念を込めて武装の為に持つてきた《竜骨の斧》を背中に背負い、昼食の入っていた籠を腕に括り付け、ついに洞窟へと入り込んだ。

だが――

((……真っ暗……))

それが一同の洞窟に入った時の感想である。

最初こそ、洞窟の入り口からの光で前に進めてこれたものの、数分歩いた辺りでついに誰も視覚では認識できないレベルにまで暗くなったのだ。

「さーて、入ったは良いけど、文字通りお先真っ暗だぞ」

キリトの能天気な声が洞窟内に響き渡ると、それにユージオが反応する。

「待ってよ、これじゃあ蠟燭も取り出せないじゃないか」

「ユージオ、俺氏、蠟燭なんてもん持って来てねえ」

「……」

「痛い!! おい、お前見えないとか嘘だろ!! 肩パン痛い! 俺氏とか言っでごめん! ピンポイントだって!」

「隙あればこんな所でも漫才できるあんた達が凄いわ」

ハカリの言い分にユージオがどんな特殊技能に目覚めたのか、視認せずともハカリに無言で肩パンを決めるといふ暴挙に出た。アリスはそんなユージオ達の行動に呆れつつも、その適応性に凄みを抱いた。日頃の恨みとは時に人を想像以上に強くするのだ。

でもこのままじゃあ罅が明かないのも事実。斧を持ってきて蠟燭を持ってこなかったハカリホを存分に痛めつけた後ユージオとアリスは頭を巡らせた。

「あれ? これもう詰んでない?」

「やめろよキリト。不安になるだろ」

「なーに、どんな奴が来ようが、俺の斧でイチコロさあい!!」

元はと言えばお前の所為だろ、という言葉を込めてユージオが渾身の力を込めてハカリの足をイチコロした。

そんな状況をアリスは再び呆れたように溜息を吐きながら聞いていた。

完全に攻守が逆転しているのを良い事にユージオがハカリに攻撃的になっているのを傍らで耳にしつつ、自身のエプロンのポケットに入っている一本の草穂を取り出した。洞窟に入る前にあらかじめ調達しておいたものである。

暗闇のなかで手探りで探し当てた草穂の先端に手を触れ、ユージオ達でも知りえない術式句を唱え始める。

そして、最後に素早く複雑な印を組むと、草穂の先端にぽうつと青白い火が灯った。

すると、その光は徐々に強さを増し、周囲の暗闇を洞窟の奥へと押し込めた。

「さ、アホなことやってないでさつきと進むわよ」

アリスが洞窟の奥に踵を返し、わんちゃわんちゃしてる現場に目を向ける。

そこにはイイ笑顔で体中から大量の冷や汗を流し続けるハカリがユージオの振った斧を白刃取りしている光景があった。

もう、なんというか、どうツツコンでやればいいかアリスには分からなかった。神聖術を唱えている間に一体全体どんな起承転結があつてそんな結果に行き着いたのだろうか。

「ほんとに何やってるのよ……」

「ハアーリーツ!!」

「イカレたな。さつきと行こうぜ」

ハカリの口から反射的に出てきてしまった聞き慣れない謎の神聖語を、必死に口から垂れ流しながら洒落にならないレベルで攻守が逆転してきてしまったユージオとハカリにアリスはさも面倒臭げに溜息する。この空間、人間の性質に反してツツコミ役が少なすぎるのではないだろうか。そして、この光景を見てもワンコメントだけ言い残して構わず奥へと進もうとするキリトももはやプロフェッショナルとしか言いようがない。

取り敢えず乱入したアリスの鉄拳制裁によって、謎の喰い合いは何

とか終わりを告げた。

「し、死ぬかとおもた……あ、あと灯りありがと、アリス」

「さっ！ 行こうか！」

「ユージオ……何て輝かしい笑顔なんだ……」

「一体あの暗闇の中でどれだけの物を発散したのよ……あ、うん。どういたしまして」

何か色が々と吹っ切れたのか、過度の緊張（自業自得である）によって普段の元気は見る影も無くなっている程ゲツソリとした様子のハカリと違って、ユージオの表情ときたら実質一番付き合いの長いキリトでも眩しく見えてしまう程、彼の顔は晴れやかだった。それこそ、アリスの灯した明かりが陰るくらいには。

そんな面白可笑しくユージオが静かに発狂した事実を皆胸の中にしまい込みつつ、洞窟の奥の奥へと足を進める。

生き物の気配は無い。

ただ水が地面を流れる音と、洞窟の中を通る風が唸る音が僅かにするだけ。光のお陰で幾分か和らいだものの、先が見えない暗闇の不気味さというのはどうしても拭えない。

青白い光を放つ草穂を持つアリスと、いざというときの為に斧で武装したハカリを先頭に、暗闇をどんどん奥へと押し込んでいく。何気にハカリの袖を片手で掴んで合法的にくっ付いている辺り、アリスは相当ちやつかりしている。

「……この奥に、あの《ダークテリトリー》があると思うと感慨深いなあ……」

「でも、それってかなり前の話だろ？ 全部おとぎ話の線だつて出てくるぞ」

延々と続く洞窟にユージオが不安を覚えたのか、そんなことを口走る。

だが、キリトの意見には先頭で歩きながら会話に耳を傾けていたハカリもたたずね同意見である。

と、いうのも、村からここまでの道のりで思うところがあるからだ。ハカリ達のような子供も、果ての山脈への道のりは言伝で耳にして

いる。だが、村人から聞けることはどれも曖昧で、最終的に違う誰かに聞きなさい、というやり取りの繰り返しとなる。これが表す事はつまり、誰もその詳しい内情を知りえないのだ。

だから、この果ての山脈の洞窟に到着した時のキリトとユージオの反応はとてもじゃないが、信じられないという様子だったのだ。

先週の休息日にハカリとアリスの二人はあらかじめ果ての山脈の洞窟まで到達していた為、驚愕の度合いこそ少なかったものの、村の認識に対して違和感が深まったばかりだった。

「ま、下手すればうちの村は三百年以上あの《天職》のサイクルを繰り返している可能性があるからな。当然開拓だって進まないだろうし、開拓が進まなかったら新たな《天職》だって生まれえない。開拓する気が無いからこうして半ば《オーク》とか《ゴブリン》みたいな存在が空想かするんだらうよ。……アリス、近い……」

キリト達の言い分にハカリが先頭を向きながら答え、後ろからユージオ達の納得の声が聞こえるも、それから先を耳で拾う余裕をみるみる無くしていく。

アリスが、近い。

現在、アリスはハカリの右腕の裾を掴んでいる——筈だったのだが、次第に接近して最終的に服を掴むどころじゃ収まらずに腕に手を回す事態になっている。妙な所で奥手である彼にこの急接近は充分応えるのだ。

だが、そんなハカリの様子にアリスは不満げに両目をジト、と細める。

「な、何よ。か弱い女の子をほったらかす気？」

「い、いや、そういう訳じゃないんだが……そのく何と言いますか？」

この前《衛士》のおっさんの所の息子を木の棒で打ち負かしていたような気がするが。

流石のハカリも女の子に対してそれを言うのは無粋だろうと思っただので、ギリギリの所で留めておく。実際、アリスはハカリをコケにした息子を許せなくてそのまま試合に持ち込んだだけなので、彼女に

対する非は全く以って存在しない。

「あく、何だか熱くなつて来たなあ……なあ！」

「これは直ぐにでも氷を探さなきゃね」

外野が何か言っているが、ハカリがそれに答える事は無い。いや、聞く余裕すらない。

洞窟の中でソルスは差し込まず、それなりに涼しい筈なのに、ハカリは自分の体がじわりと少しづつ熱っていくのが分かる。それはアリスも一緒に、彼女自身も大胆な行動に出ているとは自覚している為、顔周辺の温度上昇と同じく恥ずかしさも通常の何倍にもなっている。

「そ、そういうえば、昨日から気になっていたんだけど……」

「な、何だよ……」

会話が途切れるのは不味いと思つたのか、今度はアリスが話題を振ってきた。このハカリという男、たまにはしっかりとすればいいんじゃないだろうか。

今ではキリト達も空気を読んでか、ニメル以上と露骨に距離をとっている。空気を讀んだのではなく、空気に耐え切れなかったというベキかもしれない。

「どうして、あの樹を倒そうって思つたの？ どうして、剣士になろう躍起になつているのよ？」

だが、アリスのそんな様子から零れたのは純粋な疑問だった。アリスからしてみれば、少し気になった程度の内容ではあるが、何故かハカリはそうはいかなかった。

そこで、ハカリは少しばかり真剣に考えてみる。

自分はどうして、騎士になろうとしたのかを。

どうして村を出ようと思つたのかを。

キリトは騎士に憧れて。ユージオはおとぎ話の英雄《ベルクーリ》の所業に惹かれたからだ。ちゃんとこうなりたいという物があつた。

ハカリにもベルクーリに対する憧憬はある。だが、それはあくまで尊敬しているだけだ。敬っているからって、それになりたいと思うかは全く別の話。その点、ハカリは凄いと感じ、かつこいいとは思つて

も、そうなりたいとは思えなかった。

では、ハカリは何なのだろうか。

一瞬のうちに何度も、何度も頭の中で自身の内で問い、議論したが、頭が混乱するだけだ。結論は簡単には出ない、という事が分かっただけ。

だが、それも無理な話だろう。彼が騎士になろうと躍起になっていたのは、無意識のうちの抱いた願望なのだから。

あとは本人が気づくかどうかだ。

だが、今の所分かつている事は――

「――悪い、うまく言葉に出来ねえ」

「は？ 何よそれ」

――こうして、目の前にいるアリスが関係している。

ハカリもそこに関しては確信に近いものを抱いていた。

「む……もしかして私に言えない事情でも？」

「いんや、そんなんじゃない――」「につきしつ！――ぞ……？」

アリスに妙な疑いを掛けられる前にハカリが訂正しようとするが、突然発生したくしゃみによって妨害される。

「ああ、悪い。なんか急に冷えて来たからさ」

「いいんじゃない？ ひと段落着いたみたいだし……にしても何だか本当に寒いね……」

「……！ ハカリ、見て！」

バツが悪そうにキリトが言い放つが、寒いという意見にはユージオも同意のようだった。

すると、アリスが何を思いついたのか、青色の灯りに向かったほうと息を吐いた。すると、アリスの吐いた息が洞窟の空中をほんの少し、白染めする。

「外は夏だよな……？ と、いう事は氷も近いってことか」

「洞窟って事もあるんだろうけど、これだけ寒くなるっていったいどれだけ大きい氷があるって言うんだ……」

「ま、全部持っていくわけじゃないし、問題ナシさ」

「そうと分かれば話は早いわ。とつとと行くわよ」

先程よりも少しばかり距離を詰め、四人組で纏まりながらハカリ達は洞窟を歩き進めていく。歩き進める程洞窟の温度が下がっていくのを感じて、ハカリ達は自分らの目的のものがこの先にあるという期待感に満ち、自然と歩む速度も速めていった。

一定のリズムで洞窟に響き渡る靴底の音と今でも流れ続けるルル川が反響する。

ふとそこで、アリスが期待感の裏に残るちよつとした心の不安を吐露した。

「——もし、本当に白竜に遭遇したら？」

「まあ、大丈夫じゃないか？ ベルクーリが白竜に追いかけられたのは《青薔薇の剣》を引き抜こうとしたからだし。氷貰うくらいだったら鼻で笑って許してくれるだろ」

「それで怒ったら？」

「はっはっは」

「何とか言いなさいよ」

ハカリの空笑いにアリスがハカリの腕を小突きながら文句を言う。だが、そこまでは流石に保障しかねるだろう。ぶっちゃけ、白竜が襲ってくる可能性の方が高い訳で、いざとなったら逃げの一択に限る。

「おい、見ろよ」

アリス達がじゃれ合っているのを他所にキリトとユージオは早速手がかりを見る毛ていた。洞窟のごつごつとした岩肌にあつた窪みに溜まっていた水が薄く氷を張っていたのだ。

キリトがそれを砕き、ユージオが大きく散った欠片を拾い上げるが僅か数秒でその氷は溶け、水滴へと変わった。

「氷だね。きつともう直ぐなんだと思うよ」

嬉しそうに顔を綻ばすユージオに釣られてハカリ達もその顔に笑顔を浮かべる。

そして、早く進もうとアリスが草穂を正面に向けると、同じように凍った水が青白い光を反射させ、洞窟をもっと明るく照らす。

そこから、ハカリ達は胸躍る期待感に身を任せ、転ばないように一

応気を付けながら小走りに進む。すると、百メル程進んだ辺りで洞窟の奥の奥に光る何かを見つけた。

そこは絶景だった。

光を指しながら小走りで駆け抜けた場所には、先程ハカリ達が歩いた道とは比べようが無い程、夢想的な光景が彼らの視界を奔ったのだ。

洞窟と称するにはあまりにも広すぎる。壁いっぱい張り付く氷は氷と称するにはあまりにも綺麗すぎた。極め付けにはルーリッド村の教会前の広場より大きく見える広大な湖。いつしか見た宝石よりも綺麗な天井から下りる六角柱の氷柱は神聖術によって作った草穂の光を反射させ、周囲をより幻想的に照らしつける。

音も、あのルール川の源泉なのだろう湖から流れる水のせせらぎのみというのがまた、ハカリ達の息を吞ませた。

「——これなら村全体を冷やせそうだな」

「違うない」

キリトの呟きに対して、ハカリが即座に答え、周囲に笑い声が広がる。

「湖の中心、行ってみようよ」

そして、この光景には普段アホなハカリと若干そのくらいがあるキリトを諫めるユージオも好奇心が優る。皆もそれに賛同し、草穂を持つアリスと武装するハカリを先頭に氷の湖へと足を踏み込んだ。

「……ッ!?!」

「え……」

だが、嬉々として踏み込んだハカリとアリスの足は氷の上で見事に急停止した。その表情に明らかかな動揺を浮かべて。

「どした？ ハカリ、アリス」

「急に止まって何かあった……の……か？」

目の前の、具体的には照らされた山に注目した。

それは氷の頭蓋だった。その背後には様々な形をした骨が山を作り上げている。

そして、頭蓋に数えきれないほど並んだ牙、頭から伸びる角、細長く伸びている鼻孔。

「白竜の……骨……？」

それは間違いなく、《北の白竜》、その骸だった。